

## 密議

関西電力大飯原発の再稼働を巡って、再稼働を急ぐ政府と反対の周辺自治体との間で、議論が暗礁に乗り上げています。

政府は、「需要やコストを勘案」して再稼働が必要と主張しています。また、原発がある福井県は、再稼働に慎重ではありますが反対を鮮明にしているわけではありません。むしろ、政府が責任を持って再稼働に向けた方針を示すことを求めています。一方、消費地であり、かつ事故が発生した場合には影響を受けることが懸念される滋賀県や京都府等周辺自治体は、国の安全基準に対しても不信感を抱いており、再稼働反対の姿勢を崩していません。

原発を再稼働させるか否かは、原発の安全性についての評価によって判断すべきであり、それが技術的、客観的に確認されれば、本来再稼働が可能なはずですが。ところが、大飯原発の再稼働に向けた議論が不透明で、先に進まないのは何故なのでしょう。それは、一言でいえば、政府の原発政策に対する国民の信頼感の喪失とあって良いと思います。

福島第一原発事故後の政府の対応の拙さ、特に、国民、就中被災地の方々に適宜適切に情報を提供するという、肝心要のことが十分なされていないことが、国民の政府への不信を増幅させているのではないかと考えられます。

こうした中で、内閣府の原子力委員会が核燃料サイクルの推進側だけを集め、20数回にわたり秘密の勉強会を開いていたことが明らかとなりました。また、この勉強会には近藤委員長も4回出席していたといわれ、事実上、この秘密の勉強会に一定のお墨付きを与えていたといわれても致し方ないでしょう。

この20数回というのは、本来の担当として核燃料サイクルの問題を検討している小委員会の審議の回数を上回っているということですから、原発推進に随分と入れ込んでいるという感じがします。

特に、勉強会の中で核燃料サイクルの今後のあり方に関する小委員会の報告書原案が、小委員会開催前にもかかわらず配付されたことは問題だと思えます。

この件に関して、藤村官房長官は「専門的なデータや知見の提供を求める場だった。問題とは思わない。」としています（5月26日付朝日新聞）。また、

秘密の勉強会に4回出席した近藤委員長も「挨拶ただけで問題ない。ただ資料の配付まではやり過ぎだった。」と述べているようですが、そういう問題ではないでしょう。

政府関係者は否定していますが、勉強会を通じて小委員会の報告書原案を推進派に有利に働くよう書き換えた、という批判がでてくるのは、勉強会のメンバーの顔ぶれと、秘密性の故でしょう。

出来うるかぎり客観的、科学的、専門的データ情報を収集することは必要である、というのはその通りですが、それを何故推進派だけで、しかも秘密裏にする必要があるのでしょうか。

原発推進派による密議は、勉強会と銘打ってはいますが、できるだけ国民に分からぬように、目に触れぬところで仲間が集まって対策を講じる謀議の場、そんな図にしか見えないのは誠に残念です。マスコミからも「原子カムラ」と揶揄される所以です。

今こそ、日本の将来を見据え、しっかりとした政策議論をしなければなりません。政府も原発推進派の方々も姑息な対応をせず、堂々と国民に説明すべきであり、また反対派の方々も感情に流されず、その是非を考えるべきです。そして、そうした環境を作るためには、政府に対する国民の信頼の再構築こそ急務であることを、特に申し上げたいと思います。(塾頭 吉田 洋一)